

謝
辭

本日は、今年度金沢大学を退職いたします私どものためのこのような記念式典を催していただき誠にありがとうございます。只今、山崎学長から心温まるねぎらいのお言葉を頂戴し、私ども一同、心より感謝申し上げます。

私事ではありますが、私は本学理学部を昭和四九年に卒業、五二年に大学院を中退して、がん研究所・助手に採用されましたので、足掛け四〇年の長きに渡り、本学にお世話になったこととなります。

芭蕉の句に「夏草や 兵どもが 夢のあと」という有名な句がありますが、まったく歲月というのは、そのようなもので、過ぎ去ってしまえば、まことに一瞬の夢のように思われてまいります。そのような中で、我々退職者の多くの心地よい記憶は、兼六園内を通勤・通学路とし、満開の桜の下、石川門をくぐって登城したあの風景ではないでしょうか。我々の年代は、一九六四年の東京オリンピックを契機とするいざなぎ景気、ジャパンアズナンバーワンと浮かれていたバブル経済を経験しました。しかし、昭和五十年代に高度経済成長期は終わり、平成に入りバブル崩壊から「失われた二十年」と呼ばれる深刻な低成長期となりました。我々は、金沢大学に在職し、金沢大学に守られながらまさにジェットコースターのような時代の中を生き抜いてきました。この間、「神田川」の世界に憧れ、「なごり雪」の景色を想い、

「クリスマスイヴ」で東京駅新幹線ホームを妄想した青春時代でした。

科学、経済、文化など全ての分野は、直線的に変化・進歩する訳ではありません。時代を築くようなエポックメイキングな出来事をきっかけに劇的に変化します。とりわけインターネットによる情報網の進歩はまさに世の中を一変させました。一九九五年にリリースされたウインドウズ95に同梱されたInternet Explorer 1.0がインターネット時代の幕開けとなり、二〇〇四年のFacebook、G-mailなどの登場により、ネットにつながれば望むサービスが受けられるクラウドコンピューティングの時代となりました。さらに十年前、二〇〇七年のiPhoneの登場によりモバイルネットワークが爆発的に広がり、いつでもどこでもネットに繋がる時代となりました。また、人工知能の進歩により、コンピューターが囲碁、将棋などの知的ゲームにおいても人間を凌ぐ様になり、その進化のスピードは想像を絶するものであります。

しかし、このような急速なIT化は必ずしも我々労働者を幸福にしたとは思えません。我々退職者の年代はコンピューター画面の前で、「タブをドラッグ、クリック」というようなコンピューターの指示に茫然自失の日々を経験してきました。悔し涙にくれる中高年者を多数見てきました。ガラケーからスマホに切り替えては後悔する始末です。

我々退職者はまだまだ若造には負けぬと強がってはみても、とても以前のパフォーマンスは期待できません。経験を頼りに乗り切れるような現代社会ではありません。それをできると言い張るのは老害以外の何者でもあ

りません。次世代を積極的にリードできる人材を養成し、余裕を持ってバトンタッチすることが我々の使命と考えます。マッカーサー元帥の「老兵は死なず只消え去るのみ」とは、何かを成し遂げ、すべてを見届けて静かに退場していくことは、退職者の栄誉ある姿であり特権であると私は解釈します。

二〇〇四年の大学法人化以降、運営費交付金の配分基準のひとつとして大学ランキングなるものが持てはやされるようになりました。ランキングの基となるグローバルスタンダードなどは我々にとつては全くの異種格闘技のルールであります。価値観を創出すべき大学が、大学ランキングという乱暴な形の価値観を押し付けられたのでは、その存在意義すら失いかねません。教育機関として、人材を輩出することにより社会に貢献する大学は、自らを進化・発展させるべき人材を自らの手で育成しなければなりません。ヘッドハンティングなどと姑息な手段により生き延びようとする組織では、組織が生き延びたところで組織を構成する人々が幸福になれるはずがありません。かつて幻の帝国大学と言われた金沢大学が、今再び世界から尊敬を集める大学へと発展していくことを退職者一同、強く期待しております。今後は大学OBとして、微力ながら我々も出来得る限りのお手伝いをさせていただく所存であります。

最後に、金沢大学職員皆様方の益々の御健勝と御発展をお祈り申し上

げ、私の謝辞とさせていただきます。長い間、本当にありがとうございました。
た。厚く御礼申し上げます。

平成二九年三月二八日

退職者代表 佐藤 博